

三井のリフォーム住生活研究所 所長 西田 恭子

春のお茶会

古い友人から茶会へのお誘いを受けた。

茶室は一六世紀にわび茶を信奉する茶人が民家を芸術の原形として関心を持ち、その中に寂びた美をみつけて芸術という高さにまで昇華させたものだ。

やっときた春の日差しに、「お茶会もいいものだね。茶室も見学できるし、お薄を一服いただきながら、楽しいおしゃべりを……」と、即座に快諾した。

だが後日送られてきた案内状を見て、どうやら私が思っていた茶会とは趣が違っているようだと思いついた。公園内にある茶室「日月庵」や広間「星辰堂」などを貸し切り、濃茶席が一席薄茶席が二席の点心(お弁当)付きの茶会だった。

慌てて花嫁修業の一環として、ずいぶん昔に習っていた茶道の本を探したが、もはやどこにいったのか分からず、インターネットの動画サイトで、にわか勉強してその場に臨んだ。

着物姿の方々が並ぶ中、かしまって緊張気味に参加させて頂いた。一番にお茶をいただくお正客になってはいけない、最後の客に

もなっってはいけない。真ん中に座り、右の方がなるとおりにして、次に回せば何とかなるだろうと考えていたのだが、なぜか最後の客になってしまった。

でも皆様、慣れない私の所作も大目に見てください、まあまあつつがなく過す事ができた。冷や汗ものではあったが、私自身は大変この世界を楽しんだといえる。優雅な静寂の世界で交わされる上品な会話。日ごろは、いかに短い時間でたくさん喋り、盛りだくさんな内容を凝縮することはばかり考えて過ぎてしている私には、驚くほどの異空間だ。

茶菓も格別に美味しかったのだが、その日の収穫は「掛け軸拝見」と言いつつ、茶室、広間の床の間、鴨居、天井などの素晴らしい造作を、身近にじっくり見させていただいた事だ。

最近和室をリフォームでどんどん撤去し、広々したりリビングにするための空間づくりが進んでいる。畳を残す事もあるのだ



が、リビングに入ったら多目的利用のオープンな畳コーナーにする事が多い。床レベルもバリアフリーに畳を埋め込んで開放的だ。

茶室の飛び石から扇子をかざして礼をもって入るにじり口は、バリアフリーとはほど遠く、限られた内部空間の利用用途は明確だ。

そんな中で静かに流れる時間は忘れていた至福の時であった。日ごろ畳の復活を願っている私には、心が生き返る思いがした。

リフォームで家の一角に、日常を離れた空間を作り出して欲しいとおっしゃり方がいるが、やはり己を取り戻し、明日に向かえる場所を望まれているのかもしれない。



西田恭子氏のプロフィール「一級建築士。「三井のリフォーム」で設計を手かけ二五年。暮らしの創造に貢献する「三井のリフォーム住生活研究所」の所長に就任。新聞・雑誌・書籍の執筆、各種セミナーで講演を行う。文化女子大学非常勤講師。日本女子大学住居学科卒。